



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	外国人多住地域の教育と国際交流活動：第1部 公立学校における外国人児童・生徒の教育と学校生活：第2章 外国人の子どもの教育と学校生活
Author(s)	小野寺, 理佳
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 19, 9-18
Issue Date	2002-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22640
Type	departmental bulletin paper
File Information	19_P9-18.pdf



第2章 外国人の子どもの教育と学校生活

はじめに

日本に長期的に滞在する日系ブラジル人が増加しつつある。彼らの日本との関わり方については、「帰国説」「反復出稼ぎ説」「定住説」などいくつかの解釈があるが、いずれにせよ滞在の長期化は彼らに「定住民」「地域住民」としての性格を新たに付与する。家族帯同での来日あるいは家族呼び寄せによって、日系ブラジル人子弟の教育や学校生活をめぐる問題が注目されているが、彼らにとって日本の学校教育は日本人との「共生」の可能性に対していかなる意味をもちうるのだろうか。

そこで、ブラジル籍の小・中学生とその両親を対象として行われた調査をもとに、学校教育に対して日系ブラジル人の子弟および親が何を期待し、どのように取り組み、彼らにとって何が問題になっているのかという問題を検討する。ただし、就学年齢に相当する子どもの半数弱が不就学であるような状況の下では、ここで取り上げた「公立学校に就学している子ども」と「日本の学校教育に子どもを送り出している親」をもって、日系ブラジル人親子全体を代表させることができないことは言うまでもない。本稿では、この点をふまえたうえで、彼らにとっての日本の学校教育の意味・位置づけを考える。

表1 調査概要

調査題目	毎日の生活と日本人の子どもとのふれあいについての調査（児童・生徒用） 親の教育意識に関する実態調査（両親用）
調査期間	1998年9月
調査対象	群馬県大泉町の公立小・中学校に在籍する日系ブラジル人児童 （小学5年生38人）・生徒（中学2年生21人）計59人とその両親
調査方法	質問紙配布→留め置き法、一部聞き取り
有効回収率	児童・生徒 69.5%（41人）、両親 54.2%（32人）
有効親子票	30組
30組の内訳	小5女子：小5男子：中2女子：中2男子=13：10：5：2 30組中、聞き取り調査したのは6組

表2 滞日歴および両親の職業（ケース番号に括弧を付したものは、日本語学級通級者）

ケース No	学年 性別	滞日 年数	大泉町 在住歴	父の職業 (ブラジル)	母の職業 (ブラジル)	父の職業 (日本)	母の職業 (日本)	世帯収入 (万円)
1	小5男	8年	8年	店員	主婦	農業	主婦	～200
(2)	小5女	8月	8月	農業	農業	工員	工員	2～400
(3)	小5男	11月	11月	運転手	受付	工員	工員	2～400
(4)	小5男	6月	6月		主婦		工員	
5	小5男	7年	7年		主婦	工員	工員	2～400
6	小5男	5年	5年		教員		工員	2～400
7	小5女	4月	4月	会社員	会社員	工員	工員	
(8)	小5男	8年	8年	会社員	銀行員	工員	工員	2～400
9	小5男	9年	9年		主婦	工員	工員	
(10)	小5女	1年半	1年半	自営	自営	工員	工員	
11	小5女	7年	3月		公務員		主婦	
12	小5女	8年	4年	研究職		商店	食堂	2～400
(13)	小5男	4月	4月	工員	工員	工員	工員	2～400
14	小5男	8年	8年	店員	店員	無職		～200
(15)	小5女	1.6年	1.6年	大工	主婦	工員	工員	2～400
16	小5女	3.6年	3.6年	配達	主婦	工員	主婦	2～400
17	小5女	6年	1年	自営	自営	工員・商店	工員・商店	6～800
18	小5女	8年	8年	農業	銀行員	工員	事務員	4～600
19	小5女	4年	4年	技師	学生	工員	工員	2～400
20	小5女	7年	3年	自営	主婦	工員	工員	4～600
21	小5女	3.5年	3.5年	自営	銀行員	工員	工員	2～400
(22)	小5男	1年	1年	工員	工員	工員	工員	2～400
23	小5女	7年	7年	時計屋	主婦	工員	工員	4～600
24	中2男	3年	3年	ブライダル	主婦	工員	工員	～200
25	中2女	8年	3年	教員	教員	工員	販売員	2～400
(26)	中2女	1年	1年	工員	主婦	工員	工員	～200
(27)	中2女	4年	4年	研究職	看護人	工員	主婦	2～400
28	中2男	7年	4年		主婦	工員	主婦	4～600
29	中2女	9年	9年			工員	工員	2～400
(30)	中2女	8年	8年	技師	教師	工員	工員	2～400

調査概要は表1に示した。親子の関わり方や考え方の違いを把握できるよう、有効回収票のうち親子ペア30組に限定した。30組親子に関する基本的データは表2に掲げた通りである。

第1節 勉学に関わる場面

第1項 親と学校教育との関わり

後述の第1部第4章「外国人に対する教師の意識」における教師へのインタビューにもみられるように、日系ブラジル人の親に対しては、学校への協力的な態度がみられないことから、放任主義との批判がなされることがある。親への批判が生まれる背景には、日系ブラジル人の子どもたちが学校授業に適應していないという共通の現場認識があると思われる。勉強の出来に関する子ども自身の自己評価において、意外なことに水準以上との評価が半数以上を占めている事実は、教室内で彼らが「特別扱い」されていることを推測させる。例えば、「よくできる」と自己評価しているのはすべて小学生（6人）で、そのうち4人が滞日期間1.6年未満の日本語学級通級者なのである。自己評価が水準以上であることは「授業がわかる」ことと同義ではない。なかには、滞日が長期化しても日本語学級を修了できず、授業についていけない子どもも存在するのが現実である（来日後4年経過しても「先生の日本語がわからない。授業全般わからない。」No.27「どんどん進んでしまうので勉強がおくることが多い。」No.25）。それでも、学業不振やそれに関わる自尊心の問題に対する親の関心は進学に対する関心に比較すれば希薄であるように思われる。

しかし、そのことは、彼らが自分の子どもの教育を放擲していることを意味するわけではなく、親自身の日本語能力が不十分で（30組中、家庭内でポルトガル語のみを使用している親子が12組、それ以外は日本語とポルトガル語併用）学校側とも日本人のクラスメートの親とも密な情報交換ができないこと、就業の都合（例えば県外就労）で時間的余裕がなく学校での集まりに参加することができない、などの事情によるところが大きい。

第2項 進学への期待

親たちの学校教育への期待は子どもの進学に関する希望に顕著に表れている。即ち、9割近い親は、進学先が日本であれブラジルであれ、短大以上の高等教育を望んでいるのである（表3）。社会における成功要因として家柄・親の地位や才能、運・チャンスを重視するのは2ケースのみであり、その他は両親のうち少なくとも一方が学歴や努力を選択している。子どもに望む職業をみても、医師、歯科医師、獣医師、技師など社会的・経済的安定を可能にする職業が目立つ。翻って、彼らの子どもが義務教育の年齢にあることを考えると、親ほどではないにせよ、彼らにもまた高学歴志向の兆しがあるとすれば、それは親の考え方の影響のためと思われる。日系ブラジル人の子どもの実際の進学状況を考えれば、半数（15人）が短大・大学以上の進学を希望するというのはかなり高い比率であり、親の学歴期待の高さを反映した数字と理解することができるだろう。

このようにみてくると、日系ブラジル人の親は日本の教育プログラムにそって学習することを同化の強制と認識しているのではなく、むしろ高等教育への接続のために必要なプロセスとしてとらえているのではないと思われる。

この場合、不確実な長期滞在を予定する親が多い（表4）ということは、子どもが高等教育を受ける進学先も流動的であることを意味する。帰国の条件が満たされず滞日が長期化せざるをえないなかで、親の教育プランが非常にたちにくくなっている現状（表5）を考えると、日系ブラジル人の親は、日本であろうともブラジルであろうとも、利用可能な学校教育によって有利な職業選択の準備をさせるよりほかない状況におかれているといえるだろう。

表3 親の学歴と子どもへの期待および子ども自身の希望

ケース No.	父の 学歴	母の 学歴	父の期待 する学歴	母の期待 する学歴	父が期待 する職業	母が期待 する職業	子どもの 進学希望	子どもの希 望する職業
1		中学	ブラジル	ブ短大	技師	医師	ブ大学	サッカー選手
2	中学	小学	ブラジル	ブラジル			ブ中学	
3	高校	中学		ブ日専門		自分で	日大学	野球選手
4	高校	中学	ブ大学院	ブ大学	技師	医師	ブ大学	
5	専門	中学	ブ大学	ブ大学	技師	建築家	ブ日高校	サッカー選手
6		高校		ブ大学		自分で	ブ日高校	
7	中学	大学	日大学	日専門			日高校	歌手
8	専門	高校	日大学	日大学			日大学	バレーボール
9	中学	中学	短大	短大			日高校	
10	専門	大学	ブ大学院	大学院	医師	技師	ブ短大	
11	高校	高校	大学院	大学院			日大学院	スチュワート
12	大学	大学	他国大院	日大学	自分で	教師	日大学	保母
13	短大	中学	ブ日大学	ブ日大学	自分で	自分で	ブ大学	技師
14	中学	小学	ブ大学院	ブ大学院	モデル	プロレスラー	ブ	
15	小学	小学	ブ大学	ブ大学	教師	自分で	ブ日高校	ジャーナリスト
16	高校	中学	ブ日大学	ブ日大学	自分で	自分で	日中学	
17	中学	中学	ブ大学	ブ大学	自分で	自分で	日大学	歌手、女優
18	高校	高校	他国大学	他国大学			他国大学	
19	中学	専門	大学院				日中学	警察官
20	専門	高校	日専門	ブ大学	自分で	スチュワート	専門学校	スチュワート
21	高校	専門	ブ大学	ブ大学	技師	医師	ブ大	コンピュータ
22	中学	小学	ブ中学	ブ中学			日短大	医師
23	中学	小学	ブ日大学	日大学	獣医師	歯科医師	ブ中学	獣医師
24	大学	大学	ブ日大学	ブ日大学	プロサッカー	自分で	ブ日専	
25	大院	専門	ブ日大院	ブ日大院	自分で	自分で	日専門	スチュワート
26	小学	中学	日高校				日高校	
27	大学	大学	ブ日大学	ブ日大院	自分で	医師	ブ日大学	女優
28	高校	高校	ブ日大学	日大学	音楽家	牧師	ウーソ大	バイオリニスト
29	高校	高校	日大学	日大学	看護婦	看護婦	日高校	看護婦
30	高校	高校	日大学		医師		ブ大学	

表4 親の帰国あるいは残留希望（複数回答）

帰国あるいは残留の条件	父(人)	母(人)	備考
何があってもとにかく帰国する	5	2	
母国の経済状態が改善されたら帰国する	9	8	条件付帰国希望
母国の治安が安定したら帰国する	7	5	
お金が貯まったら帰国する	12	14	
高齢になったら帰国する	4	4	
とにかく日本に残りたい	6	5	
よい仕事があれば残りたい	4	3	条件付残留希望
家族を連れてこられたら残りたい	2	3	
日本の習慣に慣れたら残りたい		1	
その他	1	1	

表5 父親の帰国あるいは残留希望と進学先希望

父の帰国あるいは 残留希望	ケース 数	父の希望する 子どもの進学先	ケース数 内訳	ケース番号
とにかく帰国する	3	ブラジル	3	1, 21, 22
条件付帰国希望	20	ブラジル 日本 ブラジルあるいは日本 ブラジル・日本以外 未回答	7 4 6 1 2	2, 4, 6, 10, 14, 15, 17 7, 8, 20, 30 13, 16, 24, 25, 27, 28 12 9, 19
とにかく日本に残る	5	日本 ブラジルあるいは日本 ブラジル・日本以外 未回答	2 1 1 1	26, 29, 23 18 3
条件付残留希望	2	ブラジル 未回答	1 1	5 11

*主たる家計担当者である父親についてまとめた。「とにかく帰国する」「とにかく残る」については、それが単独で選択されている場合を除いては、条件付帰国希望あるいは条件付残留希望のいずれかに分類した。父親不在のケースでは母親を取り上げた。

第2節 日本人との交流

第1項 親にとっての交流

親の交流と子の交流とは別個に存在する傾向にある。子どもレベルでの日本人との交流の相対的な多さに比較すると、親レベルの交流の少なさは対照的である（表6）。29家庭において、両親あるいは一方の親が日本人と同じ職場に勤務しており、職場・地域における日本人との交流経験（招待する、レジャーに行く、ボランティアを一緒にする）をもつ者も6割を超える（19人）が、日常的な付き合いは極めて乏しいのが実状である。自分の子どもに日本人の友達がいても、その友達の親と「よく話す」ことは少なく（3人）、せいぜい「挨拶をする程度」の関係（8人）であり、親交を深めるには至っていない。

表6 子どもの交流・親の交流

ケース No.	日本 友達 (人)	ブラジ ル友達 (人)	交流は 学校の 楽しみか	交流に 対する 親の意向	職場の 日本人 有無	親の 交流経験	子どもに 関わる 親の交流	日本人の 友達の親 との交流
1	5~9	25	○	特になし	いない	ない	ない	挨拶だけ
2	0	7		特になし	いる	レジャー(妻)	ない	ない
3	2~4	5	◎	仲良く	いる	ない	ない	ない
4	0	6	○	仲良く	いる	招待・レジャー	ない	ない
5	10~	5	◎	仲良く	いる	招待・レジャー	ない	よく話す
6	2~4	2		特になし	いる	ない	ない	ない
7	10~	10	○	仲良く	いる	招待・レジャー	ない	ない
8	10~	10	◎	仲良く	いる	招待・レジャー	子供会	よく話す
9	10~	1~2	◎	特になし	いる	レジャー(妻)	ない	挨拶だけ
10	0	6	○	仲良く	いる	ない	ない	ない
11	10~	4	◎	仲良く	いる	招・レジャー・ボ	ない	ない
12	10~	10	○	仲良く	いる	招・レジャー・ボ	子供会	挨拶だけ
13	2~4	7	○	仲良く	いる	ボランティア	ない	ない
14	1	5		特になし	いる	ない	子供会	挨拶だけ
15	5~9	12	○	仲良く	いる	ない	ない	ない
16	10~	2~3		特になし	いる(夫)	レジャー・ボ	ない	ない
17	10~	9	◎	仲良く	いる	招・レジャー・ボ	ない	よく話す
18	5~9	3		特になし	いる	ない	ない	挨拶だけ
19	5~9	4	◎	仲良く	いる	ない	PTA	挨拶だけ
20	10~	4	○	特になし	いる(夫)	招待(夫)	ない	ない
21	1	7		仲良く	いる	ない	子供会	ない
22	5~9	10~	○	仲良く	いる	ない	ない	ない
23	20	20~	◎	特になし	いる	レ(妻・ボ)(夫)	ない	ない
24	10~	5		仲良く	いる	招・レ・ボ(夫)	ない	ない
25	5~9	1	◎	仲良く	いる	レジャー・ボ	ない	挨拶だけ
26	2~4	30	◎	仲良く	いる(夫)	ない	子供会	ない
27	10~	20	◎	仲良く	いる	招待(妻)	ない	ない
28	10~	30		仲良く	いる	招待・レジャー	ない	ない
29	5	3,40	◎	特になし	いる	招待・レ・ボ	ない	挨拶だけ
30	0	6	○	特になし	いる	招待・レ・ボ	ない	ない

*招：招待する ボ：ボランティア レ：レジャー

*友達付き合いが楽しみ：○ 日本人の友達との付き合いが楽しみ：◎
妻あるいは夫だけに該当する：(妻、(夫)

子供会やPTAといった定期的・継続的な活動に対して日系ブラジル人の親が積極的に関わりをもたないのは、先にも述べたように、主として日本語能力の不充分さと就業事情という個人的事情のためと考えられるが、しかし、同時に、この状況は、親の世界が日本人社会とブラジル人社会にセグリゲート化されつつある現実を反映するものと考えられる。「少しは交流したいと思っているが、交流がないから住みやすい。」(No.26父)ということばに現れているように、日本人との交流が特に求められていない側面もあるからである。

にもかかわらず、日系ブラジル人の親は、子どもに対しては日本人と仲良くするように方向付けようとしているように思われる。「日本人とは付き合いがほしくない」という親は1人のみで、その他は「仲良くするように言う」19人、「日本人だからといって特に何も言わない」10人である。このことから、大人と子どもについて相異なる交流基準が親のなかに併存していると推察される。事実、子ども自身が日本人と一緒に学び、交流する意義を親は高く評価している。それは、日本語の早い習得が期待できるからであ

り、複数の言語を操れることが将来の就職に有利に働くとの認識があるからと思われる。

「日本語を覚えたら、ブラジルにある日本の会社で働くときにプラスになる。」(No.20の親)

「日本語ができればブラジルでもいい仕事につける。英語でも日本語でもできれば将来役にたつ。

言葉は大切だ。」(No.27の父)

「両方話せる方が仕事でも有利。ブラジルにおいても日本語話せると有利。」(No.30の親)

第2項 子どもにとっての交流

一方、子どもにとっては、学校、とりわけ同じクラスが友達をつくる場として重要な機能をもっている。クラス以外に校内やクラブ、家の近所で知り合うケースも多いが、家の近所や子ども会で知り合う友達も同じ学校の児童・生徒である可能性は高い。日本人の友達をもたないのは4人のみで、それ以外は少なくとも1人以上の友達をもっている。5人以上の友達をもつのは19人、そのうち10人以上の友達をもつのは13人であるが、10人以上の友達をもつ子どもで日本語学級に通う者はいないことから、交流の広がりか子どもの日本語能力によって左右されることが確認できよう。もっとも、友達の多寡と交流を楽しみに思うこととの間に相関関係はみられない。友達付き合いを学校の楽しみのひとつだと認識する者は7割を超える(22人)が、そのうち日本人との付き合いを楽しみだとする者は半数に満たない(12人)のである。日本人との付き合いのもつ負の側面は、差別を経験せざるをえないことである。

「日本人はブラジル人に命令しがちである。」(No.26)

「日本人は高飛車だと思う。」(No.2)

「意地悪が多いし、自分の国だからって外国人にいばったりする。もし、日本人が外国へ行って同じ目にあったときを考えてほしい。」(No.1)

「いじめる。クラスの人がいじめたりする。」(No.27)

差別される悩みは親にも充分認識されているものの、親の側の情報不足や親子のコミュニケーション不全故に個々の悩みが親子で共有されず、子どもが心理的に孤立する場合もある。

「両親にも友達にも相談はしない。言っても別に変わることないと思うから。もう気にしない。お母さんから見てと、こっちから見てって違うじゃないですか、見方とかが。向こうは表だけで中身みてない時とかあるから。」(No.29)。

その結果、学校外では気の置けない同国人との交流に傾斜する子どもも存在する。

「日本人とは学校だけの付き合い。日本人とは付き合いたくない。」(No.26)。

しかし、日本人の友達との交流から得られるものは遊び仲間としての楽しさだけではない。そこでは、「日本語を教わる」「勉強を教わる」が重要な柱になっており、日本語能力が不十分なために学業不振に陥りやすい彼らにとって、日本人の友達との交流は学校生活をおくるうえでの必要不可欠な情報源・サポート源という意味をもっている。特に、日本人と一緒に学ぶ一番のメリットは日本語上達の早道であると理解されている。この認識は親子で共有されている。

役に立つのは「日本語を覚えること。わかんない言葉とかまだたくさんあるから。教えてくれるっていうし。」(No.29)

「とてもよい。日本語で教育を受けているが、勉強することで将来の準備をしている。」(No.29の親)

「日本人とブラジル人がね、一緒に勉強したらとってもいいね。ふたりで遊んだら、ブラジル人も日本語覚えるし、日本人の人でもポルトガル語覚えるからね。」(No.21の親)

この場合、日本語の上達を望むのは、日本人とのコミュニケーションの円滑化や授業の理解を深めるためだけでなく、将来の就職に際しての好条件＝複数の語学力の獲得のため、とも認識されている。

「両方話せる方が仕事でも有利。ブラジルにおいても日本語話せると有利。」(No.30の親)

「日本語を覚えたら、ブラジルにある日本の会社で働くときにプラスになる。」(No.20の親)

「日本語ができればブラジルでもいい仕事につける。」(No.27の親)

「ブラジルのホンダ、トヨタの工場が拡張される。将来はそこの技師になりたい。」(No.13)

「今では日本語ブラジル語両方しゃべれるようになったから(スチュワーデスに)よりなってみた
と思った。」(No.25)

ここからも、学校での日本人との交流が、日本で生活するうえで必要な情報を獲得するための手段であると同時に、就職まで視野に入れた日本語上達の手段ともなっていることが指摘できる。この日本語重視の背景には、高学歴をもちブラジルでは専門職に就いていた者が、日本では工場のブルーカラー労働者にならざるをえないという厳しい現実がある。

例えば、両親とも大卒で父親はブラジルでは研究職に就いていたが、現在は商店と食堂の経営をしているケース(No.12、27)や、両親とも大卒であるが現在は共に工員というケース(No.24)、父親は専門学校、母親は大卒、ブラジルでは自営だったが、日本では共に工員というケース(No.10)がある。つまり、一旦国外に出ると、それまで積み上げてきた学歴も職歴も通用しないという親自身の経験が、もともとの「学歴」志向に加えて、「語学」という「手に職」的な志向を生み出すのに大きく関わっているのではないだろうか。子どもの進学希望に親の期待が反映されていると考えられるならば、この語学志向にも同様の期待を見て取ることができる。

第3節 学校文化への適応

ヒアスの禁止、掃除、給食、日本語使用といった学校での規則・習慣に対する考え方をみると、「日本の学校に行っているのだから日本のルールに従った方がいい」という意見が親子とも多数を占める。全体に親の方が観念的かつ規範的な態度をみせており、学校の規則・習慣に従う理由としては、日本の学校文化の内容そのものへの高い評価(掃除について「自分たちが汚したんだから、それは自分たちが片づけるべきだと思って。」No.29、「どの国にいても関係なく掃除することはいいことだ。」No.14の親、「規律正しいことは子どもにとっていいと思う。」No.4の親)というよりも、学校社会のルールに日本人と同様に従うことを受け入れるという立場である。日本人と一緒に学ぶことについて、親たちは日本語の早い習得を期待すると同時に、日本の文化を知ることを積極的に評価している面もある。

「よい点はとても美しい日本文化を学んでいること。」(No.1の母)

「ブラジルとは違う文化をなろうこと。」(No.3、4、8、10、12、14、25の各親)

特別扱いを嫌う背景には、いじめへの怖れや日系ブラジル人が「故国」日本において外国人扱いされることへの複雑な思いがあるものと察せられる。また、「お金を稼ぐためだけに来た人間がいろいろ注文をつけるのはよくない。考え方が違うのは仕方ない。」というある父親の言葉にみられるように、帰国を前提とした一時滞在者としての立場を守り、踏み込んだ発言を控えようとする者も存在する。いずれにせよ、学校文化に関する判断は棚上げして、とりあえずは従っておくことが得策との親の見解は、学校や日本人のクラスメート、あるいは日本人の親たちとの間で不必要な摩擦を生じさせないための配慮によるものと考えられる。ここで親たちが子どもに求めている態度は、しばしば批判的となっている日系ブラジル人の交通・騒音・ゴミ出し等のルール違反とは極めて対照的なものといえるだろう。これに対して、学校文化のなかで日常を過ごしている子ども自身は、規則や習慣の問題を親よりは具体的に考えており、それを遵守させることのもつ意味について疑問をもつ者も見受けられるが(「(ヒアスを)してるからって、別にそれが授業に影響与えないんじゃないかなと思って。」No.29)、彼らも、基本的には日本の学校ルールには従わざるをえないと考えているものと思われる。

しかし、一方で、親世代は、子ども世代がポルトガル語を忘失することを大いに懸念している。ポルトガル語離れはブラジル人としてのアイデンティティのありようとも関わる重大な問題であり、親の側の危機感は深い。

「日本人との付き合いがうまく楽しくなると、母国の言葉と文化を忘れる。」(No.12の親)

「同じ年のブラジル人の友達と言葉の壁のために付き合うことができない。」(No.24の親)

「ブラジル人の子どものほとんどが、もうポルトガル語を忘れてる。」(No.23の親)

もっとも、学校の授業時間が長いために、ポルトガル語塾との両立が困難な場合もあり、通塾者は少ない。現時点では、通塾者は3人のみであり、あとは家族から習っているのが2人、自分で勉強1人、日本語学級で習っているのが1人である。ポルトガル語学習をさせる親のなかには条件付ながら日本に残留を希望する者、あるいは、子どもの進学先として外国の大学を志向している者もあり、帰国意思や希望進学先のありようにかかわらず母語のブラッシュアップが重視されていると考えることができる。しかし、それにもかかわらず、ここで取り上げた公立学校在籍者をみる限り、ブラジル人だけの学校が欲しいとの意見は少なかった。ブラジル人学校を求める機運が盛り上がりえない理由としては、授業料負担が重い（月額2〜7万円）という経済的理由の他に、特別扱いされたくないこと、彼らにとって日本語能力を高めることが第1目標であり、最も効率的な学習方法は日本人との共学であること、帰国が未定でありポルトガル語習得の緊急性が認識されていないこと、が挙げられよう。

第4節 外国人の子どもの教育戦略をめぐる諸問題

第1項 勉学上の問題点

こうした日系ブラジル人親子の積極的な教育戦略は当然のことながら問題を抱えている。そもそも、多くの場合、進学戦略を実現させるための環境的、経済的条件等の不備という問題があり、そのことは時として進学をめぐる親子間の対立・葛藤を喚起するからである。

勉学をめぐる問題点としては、まず、第1に、親の日本語能力の低さと子どもの家庭学習をめぐる問題がある。特に子どもとの接触時間の長い母親の日本語能力が低い場合は、授業での些細な疑問点を家庭内で解決することもままならず、そのマイナス影響は深刻であるといわざるをえない。前述のように家庭での会話の中心はポルトガル語であり、日本語を習っている親はごく少数である（両親とも習っているのは2ケース、妻のみが2ケース、夫のみが1ケース）ため、親世代の日本語能力の低さは各家庭に共通する悩みとして認識されているものと推測される。例えば、親に関する悩みとして、滞日8年の小5男子（No.1）は、「お母さんやお父さんが日本語読めないこと。」をあげている。本人は既に日本語学級を修了し、現在はポ語塾へ通っている。また、「両親とも日本語ができないために勉強をみてもらうことができない」との不満がみられた。彼女は滞日8年の中2だが現在も日本語学級に通級している。家庭での親子会話がポルトガル語で行われていることが日本語の上達を足踏みさせている面もあると思われる（No.30）。

親の日本語能力が低いことは子どもの家庭自学を困難にする他に、親の学校教育との関わり方を不十分なものにす。これが第2の問題である。PTA活動は、学校や教師への意見・不満などを学校側に伝え・話し合うための貴重な場であり、なおかつ他の保護者との連絡や情報交換の場でもある。親の日本語能力の低さはこうした活動に参加することの障害となっている（「授業参観は行くがPTAは日本語ができないから行かない。」（No.30の親）「PTAにはほとんど参加しない。」（No.22の親）「PTAには両親ともよく参加するが、役員経験はなく、日本人の親との付き合いはまったくない。」（No.23の親、No.21の親）。ポルトガル語のできる教師がいればある程度の助けにはなるだろうが（「何かあったら、ポ語のできる先生と話す。」No.27の親）、それでも学校と充分な関わりをもつほどではない。

このように親が学校と密に連携することができない場合、子ども自身が現在抱えている日常的な問題点が親に充分に認識されない可能性がある。子どもの勉強の出来を親は正確に知っているのか、という現状認識の問題である。小学校段階における成績評価がそれほどシビアなものでないとするならば、周辺的な情報なしに、親たちが子どもの能力を客観的に把握することは難しいと思われる。前述のように、勉強に関する子どもの自己評価の高さを客観的評価の高さとして理解することは難しいのであり、むしろこれは「自己肯定感の強さ」「学校生活への積極的な取り組み態度」の現れとして理解するのが妥当だろう。「勉強好き」「家庭での自習時間の長さ」「通塾」と自己評価の高さも関係ないという結果がでている。こうした内実を親がどこまで承知しているのかどうか。

また、日本とブラジルの教育内容や教育の仕方、時間数が異なることへの不安を感じる親もあり、「ブラジルへ帰国すると全部学べなかったことをどう取り戻すか。特に勉強がまったく違うから。」（No.2

4) や「ブラジルの学校のカリキュラムと比較すると、不完全な科目がある。例えば、地理、世界史、社会、政治学。時間数が多すぎるため、外国人の子どもは勉強する意欲をなくする。」(No.25)といった意見がある。しかし、親が日本で教育を実際にカバーできるかどうかという点になると、科目によっては可能な場合もあるが(「算数はちょっと(教えられる)ね。ブラジルとやり方同じだから。」No.20)、特に中学校段階になると「日本とブラジルのやり方とか違うから。」(No.29)難しいのが実状である。しかしながら、親の教育力の不足を補うための手だてが十分に講じられているとはいえない。その一番の理由として考えられるのが、3点目、親の経済能力の不十分さという問題である。

家庭学習の仕方をみると、家庭教師についている者は皆無、通塾者も6名のみ、残りは教科書を利用した自学である。市販の教材を利用する者もごく少数であった。第1に挙げた問題は通塾によってある程度補えると思われるが、親にとってその経済的負担は決して軽いものではなく、結局子どもの学校外の勉強条件は親の経済能力の高低によって大きく左右されてしまう。親世代の日本語習得にも経済的条件が大きく関わっている。習得意欲はあっても、就業を優先させる必要があり、その都合により時間を捻出することが困難な場合、あるいは、日本語習得に必要な出費を負担することが経済的に難しい場合も考えられるだろう。

これまであげてきた3点は、いずれも、子どもが勉学へ取り組む際に親(あるいは家庭として)の諸条件が障害となる場合であるが、しかしながら、日系ブラジル人の子どもの教育をめぐる最大の問題は、子どもの勉学へのモチベーションを高めることが難しいということであろう。そもそも日系ブラジル人の教育戦略は滞日予定の流動性によって大きく左右される。親自身も帰国予定がたてられないままに滞日が長期化しているのが現状であり、義務教育段階の子どもは親の行動に従わざるを得ないため、進学を含めて自らの将来を具体的にイメージすることは難しいと思われる。「ばかにならないように(ブラジル人も学校に来た方がいい)。大きくなったら仕事もないと困る。頭いいと仕事いっぱいある。」(No.21)という子どもの言葉は、まさに親が日頃言い聞かせていることに他ならないと思われる。高等教育希望者は小学生のおよそ半数を占めているが、将来就きたい職業をみると、サッカー選手、野球選手、歌手、スチュワーデス、女優などがあげられており、職業と進学とが結びつけられているとは考えにくい。いずれにせよ、流動的な状態は、子どもが自分の意志で将来設計をすることを困難にすると考えられ、進学について自身が考えなくてはならない時期をむかえたときに、子ども本人にとって大きなストレスになることが予想されるのである。

第2項 交流における問題点

日系ブラジル人親子の日本人との交流場面をみると、学校での勉学に関してと同様に、いくつかの問題および親子間の対立・葛藤の可能性を指摘することができる。この親子間の対立・葛藤の根底には、教育戦略の核としてやや観念的に交流のメリットを重視する親世代と、交流のデメリット(差別的待遇など)を現実経験せざるをえない子世代との意識のずれがあると思われる。そこで、交流をめぐる問題を整理すると、以下になるだろう。

まず第1にあげられるのは、日本人からの差別的対応の問題である。差別の経験に加えて、日本語を習得しなくても何とかなる、日本人と付き合いなくてもやっていける、という例(No.30の兄)を身近に知ることによって、交流に対する積極性が失われる場合もある。ただし、ブラジル人同士の交流が常に親密なものであるとはいえず、「日本的な顔立ちか否か」などで互いに差別するというケース(no.20)も指摘された。これは、日本人社会におけるブラジル人の位置づけが同国人同士の付き合いにも深刻な影響を及ぼしている例といえる。こうした差別に関する悩みを親に伝えていない場合もあることは前述した通りであり、子どもの孤立感、諦め、不満は募る傾向にあると思われる。

さらに子どものストレスを増大させる要因として指摘すべき第2の問題は、親自身は積極的に日本人と交流しないにもかかわらず子どもには交流を求めるという、親サイドのダブルスタンダードの問題である。親が日本人社会と盛んに交流していない理由として日本語能力の不足および就業事情があげられることは既に指摘した。就業事情については、勤務先が遠隔地であり交流の時間的余裕がもてない場合(「埼玉で

働いているため忙しく、近所や学校での日本人や他の外国人との交流はほとんどない。」No.20、「子どもが学校入っているから（大泉に住んでいる）。ここに住んでお母さん遠いところでも（働きに）行ってもいいね。（ここには子どもの）学校の友達もいるからね。」No.21）もさりながら、職場に日系ブラジル人が多く日本人が少ないためブラジル人との交流だけで用が足りるという環境的な条件が大きく影響している場合もあることを忘れてはならない。セグリゲートが進行しつつあるなかで親たちの暮らしは必然的に同国人のネットワーク中心となるのは必然だろう。「他の子どもに差別はされていないと思うが、親の方が子どもが外国人と一緒に勉強することをどう思っているかわからない。子どもは無邪気だけど親は差別的である。」（No.18）という言葉にみられるような日本人の親への不信感も、セグリゲートされた日常生活においては是正される機会をもたない。しかし、それにもかかわらず子どもに対して「日本人と仲良くすべき」という規範的な態度をとるならば、子どもの反発を招く可能性がある。ある小5女子は交流すべきことは認めつつも、「日本人がブラジル人のこと悪く言うから、それには従わない」と述べ、また別の女子は、「親に対しては‘はいはい’と適当に返事をしておいて自分で判断する」と答えている（No.29）。子どもは現実の交流のありように常に不満と疑問を抱いているのである。

では、今後、日本人との交流のスタイルや内容が変われば、両者はより友好的で親密な関係になっていくのだろうか。多くの子どもが、「日本語や日本文化を教わる」だけの関係から、互いの言語や文化を教え合う関係へと移行すると予想している。しかし、より相互的な交流によって、より親密な関係が結ばれるわけでは必ずしもないのが現実である。例えばある中2女子は、「（ブラジルの）料理を自分の家でつくって、それをお裾分けみたいな感じで（配る）。煮物とか得意。」、ポルトガル語は「教えて欲しいっていうんだったら教えるけど」と述べる一方で、日本の文化は「大体、学校で習っちゃうから、教わることはな」く、差別を理由として日本人との今後の交流にはまったく消極的な態度であった（No.29）。教育戦略としての交流が有効性をもつとしても、差別がなくならず、親密な関係が築けないならば、親からの過剰な交流期待は子どもたちのストレスを増大させるであろう。

第3項 学校文化への適応をめぐる問題点

学校文化への適応に関しては、交流場面における親子と同様に、教育戦略の一環としてやや観念的にルール遵守のメリットを重視する親世代と、疑問を抱きつつもルールに従わざるをえない子世代との意識のずれが指摘できるだろう。

ここにおいて問題になるのは、まず、第1には、日本の文化や習慣の遵守をめぐる親の二重基準の問題である。これは日本人との交流をめぐる親の態度にみられるそれと同種のものといえるだろう。親は日本の学校教育を充分に利用するためにも学校文化を受け入れることを子どもに求めるが、これは一方的な「同化」に他ならず、疑問を抱いたまま形式的にルールに従うことを続けた場合、子どもの心理的な苦痛が増すことは大いにあり得ることである。特に、日常生活において、親が日本社会の諸習慣を尊重する態度を示していない場合、子どもがこうした親の態度に矛盾を認めて反発する可能性がある。

第2にあげられるのは、言語とアイデンティティをめぐる問題である。言語習得は、親子のコミュニケーションのありようを変える。長期滞日による子どものポルトガル語忘失、日本語能力の獲得スピードにおける親子差・家族差は、家族内・親子間の言語コミュニケーション不全をもたらす。また、ポルトガル語忘失と併行して、子どもがブラジル人としてのアイデンティティを喪失していくという現象も生じ、日本に親しむ子とブラジル人としてのアイデンティティをもたせたい親との間に葛藤がもたらされる場合もある。例えば、ケースNo.20の親は、「（ブラジルのことを）子どもにいつも教えてるね。ふたりともブラジル人だから、教えてるんですけど、子どもだからね、日本の生活に慣れてるから。」と述べ、さらに、子どもが日本語のできない母親に対してつらくあたると答えている。母親が専業主婦である場合、とりわけ日本語上達の点で他の家族に遅れをとることがあるようである（「子どもがいつも怒る。私が悪い。私、仕事もできないし、日本語も（できない）。」No.20の母親）。また、子どもが日本に順応しきれず、ブラジル人としてのアイデンティティも揺らいでいるという深刻なケースもみられる。多くの場合、頻繁にブラジルに里帰りする経済的余裕はもてないのであり、日本の学校に馴染めず、なおかつ、滞日が長期化

することによってブラジルの記憶や親近感が薄れていくという中途半端な状態にとどめ置かれることは珍しいことではない（子どものブラジル人としてのアイデンティティが揺らいでいるのは「たぶん私たちが日本に8年間いてブラジルに一度も帰ってないからではないか。」No.1の親）。

調査結果をみると、言語に関しては、「規範としての日本語使用」を主張しつつも、何らかのかたちでポルトガル語忘失対策、あるいは、ポルトガル語の再習得がなされることへの期待ももたれているようである（「日本の学校は授業時間が長いから（ポルトガル語を教える学校に行けないので）週1～2回は日本の学校でポルトガル語を教えてほしい。」No.20）。しかし、現実には難しい。日本とブラジルの両方にバランスよく関わっていくためには日本語とポルトガル語の両方が話せることが重要であると思われるが、有効なポルトガル語対策が実現されなければ、言語とアイデンティティをめぐる親子の葛藤の問題の解決は遠いだろう。

第5節 日系ブラジル人親子からみた日本の学校教育

この30組の日系ブラジル人親子の学校教育への対応を見ると、彼らはただ受け身で日本に適応させられているのではなく、自らが生きるための手段としての日本語能力を高め、高等教育進学のためのステップとしての学校教育（義務教育）に主体的なおかつ協調的に関わろうとしている側面をもっていた。つまり、端的にいうならば、彼らの学校教育への対応には、国内外において確実に通用する技術としての語学力と、社会的・経済的地位の高い職業に必須の高学歴という、いわば2段階構えで将来への準備をしている姿を垣間見ることができたのである。そこには、教育熱心な親の姿が認められた。冒頭で述べたように、ここで取り上げた親子がある意味では特殊なケースであることを差し引いても、セグリゲート化されつつある社会において、学校が、日系ブラジル人と日本人が出会い、親しく付き合わざるを得ない場所として、同時に、彼らブラジル人が必要とする日本語・知識・情報が提供される場として、大きな影響力をもっていることは疑いようがない事実である。その意味において、学校および学校教育は、日系ブラジル人と日本人の日常生活レベルにおける相互理解を深める可能性をもつと思われる。その際、小学校高学年から中学校にかけての年齢の子どもの場合、日本語習得とポルトガル語忘失の間で、ブラジル人としてのアイデンティティが揺らぎ、あるいは失われ、日本人としてのアイデンティティは未だ確立されないという中途半端な状態に陥る危険が常に存在することは上述の通りである。定住化する外国人のための学校教育を考えるうえで、こうした問題への配慮が一層充分になされることが重要であろうと思われる。

ただし、彼らの教育戦略が、とりわけ親子関係に関して、多様な問題点を抱えていることもまた事実である。親は学校との十分な関わりを持ち得ていないため常に情報不足であり、学校教育については規範的・観念的対応をする傾向にあるのに対して、子どもは日常的差別にさらされ、ストレスの多い生活を送っている。セグリゲートと定住化の同時進行のなかで、学校は日系ブラジル人親子にとってどのような場になりうるのか。また、どのような場であるべきなのだろうか。「セグリゲートされた親の世界」と子どもの世界をどのように結びつけていくのか、が今後の大きな課題となるだろう。

（小野寺理佳）